様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2022～2024
課題番号：２２Ｋ０２２６６

研究課題名（和文）「チームとしての学校」の理念に基づいた教員と特別支援教育支援員の協働モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a collaborative model between teachers and special education support staff based on the concept of "school as a team"

研究代表者
木村　光男（Kimura, Mitsuo）

常葉大学・教育学部・教授

研究者番号：５０７７９５２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、児童生徒の教育的ニーズに必要な指導及び効果的な支援を講じる教員と特別支援教育支援員との実践から、「チームとしての学校」を実現する「協働モデル」を例示することであった。研究結果から、「協働モデル」として例示した教員と特別支援教育支援員とは、対象児の子ども理解から共通目標を図り、対等な関係で協働した。また、「協働モデル」として例示した学校の教職員は、立場や役割に関係なく子ども理解を図り、子ども中心の教育を実現していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、教員と特別支援教育支援員との実践から、教職員が協働する教育的な豊かさを明らかにした。そこでは、先行研究で示唆された協働による効果や成果の検討に留まらず、協働の取り組みを支える学校組織について言及した。そこに学術的意義がある。本研究により、特別支援教育支援員は「チームとしての学校」を実現する専門スタッフとして不可欠な存在と認知され、インクルーシブ教育システムの実現に参加することが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to exemplify a "collaborative model" that realizes “school as a team” through the practices of teachers and special needs education support staff who provide effective instruction and support according to the educational needs of students. The results of this study indicated that the teachers and special needs education support staff exemplified as a "collaborative model" established common goals based on their understanding of the target students and collaborated in an equal relationship.Furthermore, the teachers exemplified as a "collaborative model" worked to understand students regardless of their positions or roles and realized child-centered education.

研究分野：初等教育

キーワード：チームとしての学校　教員　特別支援教育支援員　協働モデル　共通目標　子ども中心の教育　子ども理解　教育的ニーズ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

特別支援教育支援員は、障害のある児童生徒等の日常生活上の介助、発達障害の児童生徒等に対する学習支援などにおいて、教員を支援する重要な役割を担っている。中教審答申（平成 27 年 12 月）によれば、「チームとしての学校」を実現するには、教員と特別支援教育支援員が協働・分担（以下、協働の取り組みと略記）の在り方について、双方で具体的に理解していく必要があると謳われていた。

しかしながら、特別支援教育支援員を活用する研究は十分とは言えない状況があった。研究代表者による先行研究において、特別支援教育支援員は教員との協働が困難な場合、児童生徒への合理的配慮が理解できないまま職責を果たそうと孤軍奮闘していることが明らかにされていた。このように特別支援教育支援員は、「チームとしての学校」の理念を担うスタッフとして、教育実践上の重要な役割を求められる一方で、役割を阻害される状況に直面する場合があり、効果をあげている協働の取り組みから、そのプロセスを「協働モデル」として解明する研究は不可欠であった。

２．研究の目的

本研究は、児童生徒の教育的ニーズに必要な指導及び効果的な支援を講じる教員と特別支援教育支援員（以下、支援員と略記）との実践から、チームとしての学校を実現する「協働モデル」を例示することを目的とした。

３．研究の方法

(1) 方針

「２．研究の目的」を達成するために、以下の「学術的問い」を設定し、それらに対する「学術的答え」を導くという方針の下で、研究を進捗した。

- 「学術的問い」A：成果をあげている実践事例において、教員と支援員はいかなる役割を果たし、どのようなプロセスで協働の取り組みをしているか。
- 「学術的問い」B：協働の取り組みを支える学校組織は、支援員を「チームとしての学校」の専門スタッフとして活かす為、どのような具体的方策を実施しているか。

(2) 経過

研究の実際は、2 つのステージに区分して進捗した。

【ステージ 1】（令和 4 年～5 年）

①、実践調査

「学術的問い」A を射程に小学校 10 校 15 事例を対象として、実際の教室に入り、授業場面や生活場面を参観した。そして、教員と支援員のそれぞれにインタビューを実施した。その内容は、㋐対象児童の教育的なニーズ、㋑協働の目的・成果であった。その結果、上記㋐が概ね一致し、上記㋑が共有されていると判断した場合、協働の取り組みで成果をあげている事例とした。検討の結果、成果をあげている事例として、4 事例を抽出した。

②、協働の取り組みで成果をあげている事例調査

「学術的問い」A を射程に上記①で抽出した 4 事例を対象に参与観察及び半構造化面接を実施した。参与観察では、教員と支援員との対話及びそれぞれのアプローチを時系列で記録し、フィールドノーツを作成した。フィールドノーツには、観察者が間主観的に把握した心の動きに加え、出来事の意味をエピソードとして詳細に記した。そして、参与観察終了後は、教員及び支援員に半構造化面接を実施した。その内容は、㋐対象児について、㋑アプローチの意図、㋒協働に対する認識、㋓協働する上での工夫点、㋔役割認識である。

【ステージ 2】（令和 5 年～6 年）

③、成果をあげている「協働モデル」の検討

「学術的問い」A を射程に 3 事例を対象に検討した。「協働モデル」を抽出するため、エピソード記述法により分析した。分析方法は、エピソードを記録したフィールドノーツ（以下、エピソード記録と略記）を活用した。具体的には、エピソード記録と観察者の暗黙の背景（経験、理論、興味・関心等）との関連を吟味し、出来事の奥にある多元的な意味を抽出（以下、メタ観察と略記）した。このメタ観察により、教員と支援員にとって、適切な指導や必要な支援を実現する意味を明らかにした。事例検討の結果、1 事例を「協働モデル」として抽出した。

④、協働の取り組みを支える学校組織の調査

「学術的問い」B を射程に小学校 1 校を対象とした。対象は、③で抽出した「協働モデル」の学校である。そこでは、校長に加え、日常的に教育的ニーズを有する対象児に関与している教職員（教頭、特別支援教育コーディネーター、教務主任、養護教諭）に半構造化面接を実施した。その主な内容は、㋐協働の取り組みを支える認識及び工夫点、㋑支援員の役割と活用である。

⑤、協働の取り組みを支える学校組織の検討

上記④で得られた調査データは、全発話を逐語化し、詳細かつ客観性を確保し検討するために質的分析を行った。分析の過程はコード化・カテゴリ化による 2 段階で実施した。

⑥、分析過程及び検討結果のチェッキング

上記③、⑤の分析過程・検討結果について、研究対象者と協議を行い、チェッキングを受けた。

４．研究成果

「３．研究の方法」で得られた成果は次の通りであった。

(1) **「協働モデル」とした教員と支援員は、対象児の子ども理解を基盤に支援目標を共有した。そして両者は、対等な関係で意思疎通を図りながら、支援目標を修正したり、互いのアプローチを理解したりしながら、目標達成に向け協働の取り組みをしていた。このプロセスにより教員と支援員は信頼関係を形成した。**

(2) **協働の取り組みを支える学校（「協働モデル」の学校）の教職員は、「子ども中心」の教育理念を実現する基盤に子ども理解が在った。また、教職員には実践目標「子どもの自己決定を促しそれを後押しする」が共有され、授業や生徒指導を検討する際の共通観念となっていた。以上のことから、協働の取り組みを支える学校は、教育実践に不可欠な子ども理解を深める目的で連携・協働を図っている。それは、教員と支援員の協働の取り組みとリンクする。それ故、学校組織は自明のこととして、協働の取り組みを支えたり、支援員を「チームとしての学校」の専門スタッフとして活かしたりするのである。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 木村 光男、大井 雄平	４．巻 43
２．論文標題 特別支援教育支援員を対象とした研修会における留意点 ： 協議の受け止めを分析して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 常葉大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 209～217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18894/00002437	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村光男　吉田瑠偉	４．巻 9
２．論文標題 「特別な教育的ニーズ」のある子どもに応じたサポートの検討 －小学校に於ける特別支援学級担任と特別支援教育支援員のアプローチから－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 常葉初等教育研究	６．最初と最後の頁 99-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村 光男	４．巻 45
２．論文標題 教員と特別支援教育支援員の協働による子ども支援	５．発行年 2025年
３．雑誌名 常葉大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 141～151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18894/0002000392	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村 光男	４．巻 8
２．論文標題 迷惑行為を繰り返す児童に向けた教師間連携 －チームとしての学校の観点から－	５．発行年 2025年
３．雑誌名 教育研究実践報告誌	６．最初と最後の頁 45～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18894/0002000366	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 木村 光男、大井 雄平
２．発表標題 特別支援教育支援員に必要な研修内容 －支援員による協議後の認識に着目して－
３．学会等名 日本特殊教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村光男
２．発表標題 小学校における教員と特別支援教育支援員の連携の在り方 －エピソード記述法による検討－
３．学会等名 日本臨床教育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 木村光男
２．発表標題 迷惑行為を繰り返す児童に対応する教職員の連携・協働－エピソード記述法による検討－
３．学会等名 日本教師教育学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 木村光男
２．発表標題 教員と特別支援教育支援員の子どもを中心に据えた連携 －「特別な教育的ニーズ」を有する児童の集団参加において－
３．学会等名 日本臨床教育学会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	紅林　伸幸 (KUREBAYASHI Nobuyuki) (40262068)	常葉大学・教育学部・教授 (33801)	
研究分担者	大井　雄平 (OI Yuhei) (40802997)	中京大学・教養教育研究院・准教授 (33908)	
研究分担者	黒岩　一雄 (KUROIWA Kazuo) (70779545)	常葉大学・教育学部・准教授 (33801)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関